

# 令和4年度博士後期課程学位論文審査報告書

令和 5年 2月15日

審査員 (署名)	(主査) 金 銘 基	乙 坂 佐 吉
	玉 井 健 一	辛 次 浩 弘

学位論文提出者	学 生 番 号	氏 名
	201883	山田 政樹

## 1. 学位論文題目

ソフトウェア技術者のコンピテンシーに関する研究  
— 行動結果面接による質的調査からのソフトウェア技術者のコンピテンシー解明 —

## 2. 論文概要 別紙参照


## 3. 所 見 別紙参照

(1) 論文テーマの重要性
(2) 論述の一貫性
(3) 先行研究及び関連分野に関する理解
(4) 研究方法の妥当性
(5) 独創性
(6) 体裁

## 4. 評 価

(1) 論文審査合否 :  合格  不合格

(2) 最終試験合否 :  合格  不合格

学位論文提出者：201883 山田 政樹

## 2. 論文概要

本論文はソフトウェア技術者のコンピタンシー（＝高い業績を上げる技術者の行動特性）を実証的に明らかにすることを目的とする。前半ではまずコンピタンシー論に関する先行研究レビューを行い、コンピタンシー概念と実証的アプローチ方法の理論的根拠を明らかにしている。それを踏まえ、コンピタンシー概念と近年IT産業の人材育成の参照モデルとなっているITスキル標準を比較し、両者の概念的共通性と違いを明確にすることによって、コンピタンシー・アプローチの理論的、実践的意義を浮き彫りにしている。

後半では、高い業績をあげるソフトウェア技術者と平均的な業績をあげるソフトウェア技術者の行動特性を比較し、ソフトウェア技術者のコンピテンシー体系を実証的に導き出している。高業績者と平均業績者それぞれ3名ずつ6名を対象に行動結果面接によってデータをとり、コーディングと尺度への当てはめを通じて、コンピタンシー・ディレクトリーを構築した。また構築されたコンピタンシー体系を先行研究で提示されたコンピタンシー体系と比較しつつ、本研究結果が先行研究結果から得られる知見と大きくかけ離れていないことも確認している。

## 3. 所見

### (1)論文テーマの重要性

日本はIT技術者不足の解消、つまり効果的な育成が国家的課題とされている。また日本企業が成果主義や戦略的人材マネジメントを掲げて以来、コンピタンシー概念は従来の職務能力概念に代わって、人材育成や評価に欠かせない存在になっている。とはいえ、日本におけるコンピタンシーに関する理論的、実証的研究成果は、必ずしも十分な蓄積が見られない。企業現場の実務ニーズに応じて構築されたアドホックなコンピタンシー体系が、産業や企業ごとにバラバラに使われているのが現状である。一方、IT産業と政策当局のレベルでは、従来の職務能力概念に近いスキル標準のような概念が使われている。これまでコンピタンシーを語る研究者は少なくなかったが、以上のような実務との接点は曖昧で、理論としても深まりを欠く傾向があった。こうした現状を考えると、理論的基礎を十分固めたうえで、特定職種というドメインに立ち入り、コンピタンシー・ディレクトリーを導き出す本稿の意義は極めて大きい。これまで理論と実務の体系的なセットを提示してくれる研究は、寡聞にして知らないからである。

### (2)論述の一貫性

本論文は、ソフトウェア技術者のコンピテンシー体系を実証的に構築するという目的に沿って、すべての理論的レビューや考察、実証方法の叙述がなされており、首尾一貫した論述といえる。

### (3)先行研究及び関連分野に関する理解

コンピテンシー理論に関する先行研究、日本における実証的な先行研究のレビューは十分である。また隣接するITスキル標準に関する議論の整理や理解も十分である。少々惜しいところもある。人事管理は長い間、職務概念、または職務に紐づけられた能力概念を軸に展開してきた。コンピテンシー論は市場価値を生む業績に紐づけられる能力という性格もある。つまり市場変化の激しい時代により適合的な概念ともいえる。著者は、ITスキル標準とコンピテンシーの単なる比較をこえて、従来の職務中心の概念と対比させることでコンピテンシー論の意義をもっと鮮明に叙述することもできたはずである。しかし従来の人事管理に関する研究蓄積は膨大であり、若手研究者にすぐ手の出せる作業ではないことも事実である。研究の今後の発展に期待したい。

### (4)研究方法の妥当性

実証研究に入る前に研究目的に沿って、理論的根拠を十分に固めている。実証方法においても、コンピテンシー論の大御所といえる Spencer のコンピテンシー・ディレクトリーに依拠していること、データコーディングにはグラウンドアップアプローチの諸手順が守られていることから、妥当性を十分認めることができる。

### (5)独創性

日本でコンピテンシー概念を持ち出す論者は少なくない。また特定職種を対象にコンピテンシーを実証的に構築してみせた研究は多くはないが存在する。しかしコンピテンシー概念をこの論文ほど理論的に掘り下げた研究、またそれに基づき実証的な構築に挑んだ研究は、少なくとも日本ではあまり見かけない。またソフトウェア技術者のコンピテンシーに関する研究としても、日本では初めてである。

### (6)体裁

十分な理論研究を行い、それを踏まえて実証研究を完成させており、博士論文としての体裁に問題はない。